

累計
**38万部
突破!**

池澤夏樹 = 個人編集
日本文学全集 第9巻



一気読み必至の完全訳!

平家物語

古川日出男 訳

月報 = 高畑勲・安田登 解説 = 池澤夏樹



初回限定
松本大洋・画
特製ポスト
カード付

「**シン・ハイケ**」
爆誕!

「平家」がまるっとわかる
特製フリーペーパー

最新情報はこちら!
twitter @kawade_bungei

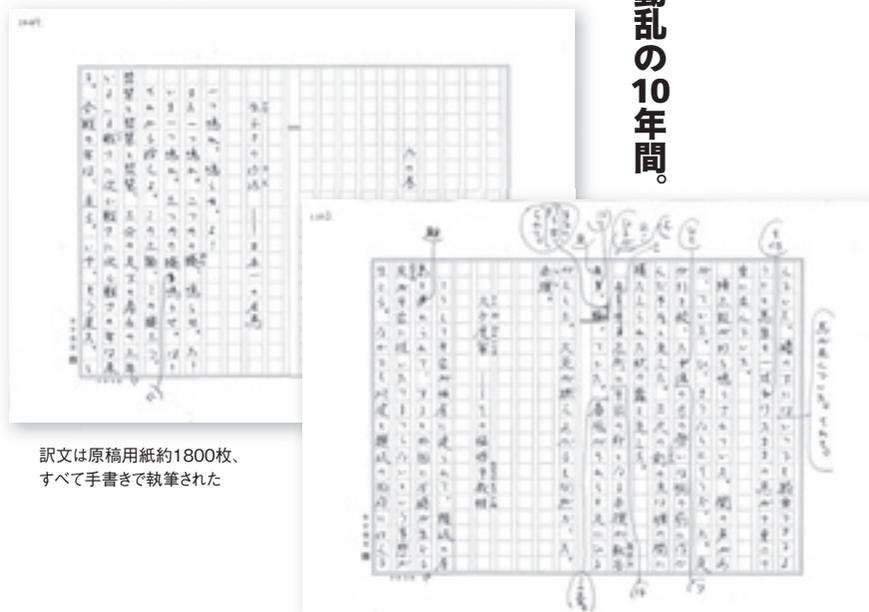
ページをめくる手も、涙も、止まらない。

国が変わる。 歴史が変わる

日本が歴史的転換を果たした動乱の10年間。

『平家物語』とは？

平安末期、貴族社会から武家社会へと向かうきっかけとなった、いわゆる源平合戦と呼ばれる動乱が勃発。武士として初の太政大臣となった平清盛を中心に、平氏一門は栄華を極めるが、悪行を重ね、後白河法皇の謀計を背景に、頼朝や義仲、義経ら源氏によって都を追われる。十七歳の若武者・敦盛の最期、弓の名手・那須与一の活躍、屋島・壇の浦の合戦、そして幼帝・安徳天皇を伴った一門の入水……無常観を基調に描かれた軍記物として、琵琶法師により語り継がれ、後世日本の文学や演劇などに多大な影響を与えた大古典。



訳文は原稿用紙約1800枚、すべて手書きで執筆された

【翻訳の特徴】

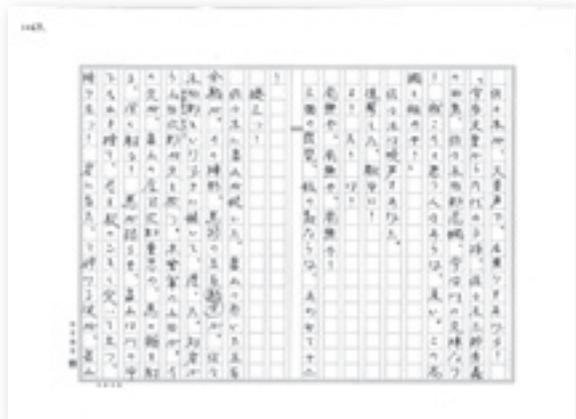
- 1 原文に忠実でありながらも、すらすら一気に読み通すことができる、流麗かつわかりやすい現代語訳。
- 2 スピード感溢れる原文の魅力を十二分に味わえる、軽妙かつリズムミカルな文体。
- 3 貴族社会から武家社会へ向かう日本の歴史の変遷を、訳文の中に批評的に溶け込ませた、作家訳ならではの大胆な試み。

「古代日本で最も武張った年代記。栄華から滅びにいたる道筋の哀感を、語り物につながる文体で伝える」

池澤夏樹

「『平家』は一人の作者の手で書かれたのではない。一人の琵琶法師の声で語られたのではない。多数の多声。そんなポリフォニックな中世のメガノベルをいかに訳すか？ さいいいは僕は答えを持っている。さあ、現代の『平家』だ」

古川日出男



編集部より

2014年より刊行開始された「池澤夏樹＝個人編集 日本文学全集」、いよいよ第Ⅱ期完結巻となる古川日出男さんによる完全訳『平家物語』をお届けします。

那須与一が舟の上から、掲げられた扇を「びっ」と射切るシーン、若武者・敦盛が熊谷直実に泣きながら殺されるシーン、屋島・壇の浦での義経の活躍、幼帝・安徳天皇もろとも平氏一門の入水……日本人なら誰もがいちどは聞いたことがあるこれらの数々のエピソード。原典だけでなく、吉川英治『新・平家物語』やNHK大河ドラマなどで知った人も多いのではないのでしょうか。

近年では村上春樹さんの長編『1Q84』中で、登場人物の少女・ふかえりが「壇浦合戦」での、安徳天皇入水の場面を暗唱するシーンがありました。村上さんはインタビューでも好きな日本の古典に『平家物語』を挙げられています。また活動再開を果たしたアーティスト・宇多田ヒカルさんの好きな言葉は「諸行無常」だとも（余談ですが最新アルバム『FANTÔME』にも収録されている名曲「桜流し」の歌詞などはまさに建礼門院の語り……！ 個人的にぜひ『平家』を読み終わった後聴いてほしい曲です）。

たった10年の動乱を元に、貴族社会から武士が闊歩する社会へと大転換を遂げたおよそ800年前の日本。それは、2016年、相変わらず混乱を極める世界、そして日本を生きる私たちにとっても決して他人事ではありません。

今回の『平家物語』を編集集中、行き当たった資料の中で「都が炎上し、焼け野原となった描写は、先の大戦の後、私たちが立ち尽くしていたあの焼け跡を彷彿させる」という、恐らく戦後すぐに書かれた文章がありました。約70年前の人々も、物語の中で炎上する都に、自らが数年の間に体験した「戦争」を垣間見ていたようです。燃え上がる炎、赤くなる空……それはあらゆる時代に普遍的に在る無常の情景そのものなのかもしれません。1954年に上映された『ゴジラ』が戦争の空襲を、今年大ヒットした庵野秀明監督の映画『シン・ゴジラ』が、2011年3月11日以降の日本の混乱を、観る人の心にふとよぎらせたように。

『平家』で起こるのは戦いだけではありません。火事、地震、突風などの災害が驚くばかりの頻度で描かれています。テロ、動乱、災害が日常の真隣にあるものとして生きなければいけない21世紀の世界。今回の「シン・ヘイケ」がこのタイミングで生まれたことは、この物語が手繰り寄せた運命そのものなのでしょう。まさに今だからこそ必読の1冊（しかも1冊で全文読める本はかつてありません！）。強くお薦めします。

泣かないのか、

この琵琶のために？

—— 古…日出男

古川日出男（ふるかわ・ひでお）



1966年、福島県生まれ。98年『13』で作家デビュー。2002年『アラビアの夜の種族』で日本推理作家協会賞および日本SF大賞を受賞。同作は07年「月刊PLAYBOYが選ぶこの10年のベスト・ミステリー」第1位にも輝いた。06年『LOVE』で三島由紀夫賞を受賞。古川版「源氏物語」ともいえる、紫式部の怨霊が宇治十帖を語り直す物語『女たち三百人の裏切りの書』で15年に野間文芸新人賞、および16年に読売文学賞（小説賞）を受賞。他の作品に『ベルカ、吠えないのか?』『聖家族』『南無ロックンロール二十一部経』『冬眠する熊に添い寝してごらん』『あるいは修羅の十億年』など。

敦盛最期 —— 当年十七歳散る

平家は合戦に敗れ、その戦陣はいずれにあつても崩れている。大将も軍兵も、散らばり、逃がっている。敗走する者たちを源氏の武士たちが追っている。目当てはただ一つ——手柄。熊谷次郎直実もまたそうしている。一の谷の西の城門において平山武者所季重と先陣争いを演じた熊谷は、平家の公達は助け船に乗ろうと考えて波打ちぎわへ逃げられるだろうと読み、磯のほうへ馬を進めた。

「ああ、絶対に俺は、立派な大将と取り組みたい」

討ちとった相手の身分が高ければ手柄もそれに応じて大きくなるから、一心にそう念じた。よい首を、と。

すると磯で、その敗走者を見出した。その一騎を。連銭鞆毛の馬に金覆輪の鞍を置いて乗る武者は、練貫に鶴の模様を刺繍した直垂に萌黄匂の鎧を着ている。鍬形を打った兜の緒を締めている。黄金作り

の太刀を佩いている。切斑の矢を背負って、滋籾の弓を持っている。

供の者はいない。

ただ一騎。

沖にいる船をめざして海へざっと馬を乗り入れ、距離にして五、六段ほども泳がせる。

沖へ。

沖へ。

「おう、そこに行かれるのは——！」と熊谷は声を張りあげた。「大將軍とお見受けした！ 敵に後ろをお見せなさるのは実に見苦しい。卑怯！ お戻りなされ」

熊谷は扇をあげて招いた。

招かれて、武者は引き返した。

応じたのだった。

そして武者は渚に上がろうとし、熊谷は、その波打ちぎわで馬を並べ、むずと組み、砂浜にどうと落ち、押さえ込み、首を斬るために相手の兜を仰のけにし、あらわになった顔に目をやると、年の頃は十六、七ばかりで薄化粧をしている。齒は鉄漿黒で染めている。お齒黒。熊谷にとっては我が子の小次郎直家ほどの年齢で、容貌はまことに美しい。どこに刀を刺してよいのか。熊谷の口から言葉が転がり出る。

「これは、そもそもどのような身分のお方であられますか。お名乗りなされ。お助け申します」

助命を口にする。と、相手が尋ねられる——組み敷かれながら。

「お前は誰か」

「大した者ではありません。武蔵の国の住人、熊谷次郎直実」

「対等にはならぬ身分か」と熊谷の名乗りに応じられ、美しい平家の若公達は続けられた。「では、お前に向かっては名乗らぬぞ。しかし私はお前にとつてはよい敵。名乗らずともこの首を取り、人に尋ねよ。きつと見知つていよう」

堂々たる受け答えに熊谷は感謝した。なんと見上げた大将なのか、これは！ この人一人をお討ち申したとて、負けるはずの戦さに勝つはずもなければ、お討ち申さぬとして、勝つはずの戦さに負けることもよもあるまい。今日の一の谷の先陣争いで小次郎が浅傷を負ったのでさえ父親の俺はつらかった。だとしたら、この殿の父親は「討たれた、首を取られた」と聞いたらどれほど歎かれることか！ ああ、この直実、お助けしたい——。

それが可能な状況か否か、熊谷は後ろを見た。さつと後方をうかがい見た。すると目に入ったのは、土肥次郎実平と梶原平三景時の、その軍勢。源氏方の侍大将たちの手勢が、五十騎ばかり、続いて現われる。つまり助ける術はない、そう熊谷は悟る。涙を抑えながら、熊谷は言う。

「お助け申したいとは存じます。しかし、我が源氏の軍兵、どうやら雲霞のよう。一面を取り囲んでおります。直実がどうしようとも、味方の武士どもが決してお逃しいたしますまい。そんなふうには他の者の手におかけするよりは、同じことならば、この直実が。直実自身の手でお討ち申して、死後のご供養をいたしましょう」

「ただ、速やかに」と平家のその若武者は言われた。「私の首を取れ」

熊谷は、あまりにおいたわしいので、どこに刀を突き刺してよいのかがわからない。目が暗む。心が、頭が朦朧とする。ものの分別というのがつかない。しかしそのままにいるわけにはいかない。土肥と梶原の軍勢がいるのだ。続々、出てきているのだ。熊谷は、斬るしかない。

泣きながら熊谷は首を斬った。

熊谷はそれから、くどくどと歎きつづけた。ああ武士の身は、この弓矢をとる身というものは！ 俺は、ああ武芸の家に生まれなければ、今こうしてつらい目を見ることはなかったのだ。俺は、ああ、情けなくもお討ち申して――。

袖に顔を押しあてて、さめざめ泣いた。

長い、長い時間。

しかし、やはり、そのままでいるわけにはいかない。若武者の鎧直垂を切りとって首を包もうと、着ていられたそれに手をかける。と、腰に、錦の袋がある。長い、細長い、その袋に入れて一本の笛をさしておられる。

「おお、不憫な。不憫な！ この暁に俺が一の谷の西の城門に攻め寄せたとき、城の内から楽の音が聞こえた。誰かが管絃をなさっていると思っただが、あれはこの人々でいらっしやっただのだ！ 現在、俺の味方には東国の者たちの軍勢が何万騎かあるだろうが、戦陣に笛を持ってきた人は、よもやあるまい。ご身分の高くあられる貴人というのは、やはり風雅。どこまでも優美で、雅びよ」

後、熊谷はこの笛を大將軍九郎御曹司のお目にかけた。その場に列座してこれを見、涙を流さない者は一人もなかった。

そして熊谷は、同じく後、人に尋ねて知る。首は、入道相国の弟の修理の大夫平経盛の子息のもので、名は大夫敦盛だと。熊谷が討つたのは生年十七歳になられるお方だった。以来、前々からあった熊谷の出家の志はいちだんと強くなった。また、笛についても知れた。その笛は敦盛の祖父、あの平忠盛が笛の名手であったために鳥羽院から賜わったという由来を持つ横笛だった。それが子の経盛に譲られ、さらに孫のうち敦盛こそは上手だということで譲り伝えられていた。笛の名は、小枝といった。

仏の教えを損なう狂言綺語の一つに、管絃もまた数えられる。それが熊谷の人生においては仏道に入る機縁となったのだから、実に心を動かされる。管絃を奏することは遊びか、否、祈りか、と。

管絃を。

絃を。

撥よ。

〔九の巻〕より〕



本体3500円＋税
ISBN 978-4-309-72879-7

イツキに斜め読み！『平家物語』

*太字は何度でも読みたい必読段！（編集部・選） ぜひ本を傍らにお楽しみください。



目次

一の巻

祇園精舎	耳を用い、目を用い	13
殿上閣討	忠盛の未曾有の昇殿	15
鱸	躍り入った神恵	20
禿髪	三百人の童たち	23
吾身栄花	一門、頂点へ	24
祇王	女人往生の挿話	27
二代后	無理強いの入内劇	42
額打論	大悪僧たち登場する	47
清水寺炎上	そのとき六波羅は	49
東宮立	次なる天皇	51

清盛の悪行

祇王・祇女の泣けるお話

いわゆる「平家にあらずんば人にあらず」登場！

源氏、蜂起

フィクサー、後白河が謀る……

二の巻

殿下乗合	悪行の第一、ここに	52
鹿谷	身懐いの一夜へ	57
俊寛沙汰	鵜川軍	63
願立	山王権現悲しむ	68
御輿振	源氏の智将、頼政さる者	73
内裏炎上	大猿の夢	77

重盛のイケメン度、光る！

俊寛だけ取り残され……

三の巻

教訓状	重盛さらに諫める	116
烽火之沙汰	忠、孝	122
大納言流罪	翌る日からの成親	127
阿古屋之松	父との距離	132
大納言死去	その最期は	137
徳大寺殿島詣	人の世渡り、さまざま	142
山門滅亡	堂衆合戦	145
山門滅亡	寺々の趨勢一	148
善光寺炎上	寺々の趨勢二	148
善光寺炎上	寺々の趨勢三	150
康頼祝言	鬼界が島の熊野詣で	151
卒都婆流	み字	154
蘇武	漢の将軍のこと	158

有王と俊寛、涙の再会！

平家唯一の良心、重盛死す……

後白河、監禁される

頼朝、登場

四の巻

少将都帰	二人のその後	183
有王	一人を尋ねて	190
僧都死去	一人の最期	195
鷹	占いの申すところ	200
医師問答	その人臥し、そして	200
無文	重盛の夢見など	205
灯炉之沙汰	大念仏など	208
金渡	波濤を越える黄金など	208
法印問答	法皇の使者、静憲さる者	209
大臣流罪	師長の琵琶	215
行隆之沙汰	一夜にして	219
法皇被流	停められた院政	223
城南之離宮	冬深ける	227

——つがえては引き、引いてはつがえ、さんざんに射て、たちどころに十二人を射殺して、十一人に傷を負わせ、箆にはただ一本の矢が残るのみ。(四の巻)

——「人というものは命運が傾きかける時に必ず悪事、悪行を思い立ちます」(二の巻)

平氏、ついに都落ち……

白髪の老武者、髪を染めて出陣!

- 横田河原合戦 — 養和より改元して、寿永へ 402
- 七の巻
- 清水冠者 — 源氏の両雄、その対立 408
- 北国下向 — その狼藉 409
- 竹生鳥詣 — 経正の見る瑞兆 410
- 火打合戦 — 内通者あり 413
- 願書 — 鳩、鳩が 416
- 倶利伽羅落 — 六万八千騎失す 420
- 篠原合戦 — 屍が北陸につきつぎと 424
- 実盛 — 老いた侍死す 428
- 玄防 — 都、陰々滅々 431
- 木曾山門牒状 — 義仲から延暦寺へ 434
- 返牒 — 延暦寺から義仲へ 437
- 平家山門連署
- 平家の十名から延暦寺へ 439
- 主上都落 — 消える法皇、消える摂政 442
- 維盛都落 — 泣きすぎる妻子 447
- 聖主臨幸 — 焦土 451

頼朝、拳兵!

清盛、福原遷都

初合戦シーン! 平氏 vs 源氏

- 競 — あの愛馬この秘蔵馬 253
- 山門牒状 — 園城寺から延暦寺へ 261
- 南都牒状 — 興福寺へ、興福寺から 263
- 永僉議 — 夜討ち叫うか 267
- 大衆揃 — 撥が鳴る 269
- 橋合戦 — これぞ最初の合戦 273
- 宮御最期 — 頼政の一家も宮も 279
- 若宮出家 — 宮の御子お一人めの運命 285
- 通乘之沙汰 — 宮の御子お二人めの運命 288
- 鶴 — 怪物二度も射殺のこと 289
- 三井寺炎上 — その大寺、全焼す 295
- 五の巻
- 都遷 — 平家の悪行、頂点へ 298
- 月見 — 光源氏を偲び、宇治も偲び 305
- 物怪之沙汰 — そして神々の会議が 309
- 早馬 — 驚愕の拳兵 313
- 朝敵揃 — この日本国の謀叛人一覧 314
- 咸陽宮 — 秦、始皇帝と敵国王子的一幕 316
- 文覚荒行 — 武者から験者へ 322

義仲、大活躍!

田舎者・義仲節が炸裂。傍若無人!

頼朝、征夷大將軍に

- 八の巻
- 山門御幸 — 都、源氏で満ちる 472
- 名虎 — いまや天皇はお二人 477
- 緒環 — 糸の先には 484
- 大宰府落 — さすらう平家 489
- 征夷將軍院宣 — 鎌倉の頼朝、その威風 494
- 猫間 — 京都の義仲、その野性 498
- 水島合戦 — 海戦ゆえに木曾勢大敗 502
- 瀬尾最期 — あつぱれ剛の者 504
- 室山 — 西から都へ、都から西へ 512
- 鼓判官 — 法住寺殿の炎上 514
- 法住寺合戦 — として寿永二年暮れる 521
- 忠度都落 — 読み人知らずの一首 453
- 経正都落 — 琵琶の名手も 456
- 青山之沙汰 — 名器その次第 459
- 一門都落 — 西へ 461
- 福原落 — もっと西へ 468

清盛、熱病で死ぬ

義仲、拳兵!

富士川の戦い。平家は水鳥の羽音を大群と勘違いして敗走

- 勧進帳 — 院の御所にて悪言 325
- 文覚被流 — 投獄、出獄、ついに遠流 327
- 福原院宣 — 髑髏と法皇のおおせと 332
- 富士川 — 緒戦の平家軍 335
- 五節之沙汰 — 緒戦の結末、その後 343
- 都帰 — 新都たちまち旧都に 348
- 奈良炎上 — 治承四年の末 350
- 六の巻
- 新院崩御 — 運命の年、陰鬱に明ける 356
- 紅葉 — 高倉院の逸話二つ 359
- 葵前 — 高倉院の愛その一 362
- 小督 — 高倉院の愛その二 364
- 廻文 — として木曾には義仲が 374
- 飛脚到来 — 謀叛続々、撥が鳴る 376
- 入道死去 — 無の一字 378
- 築島 — 善行もあった 384
- 慈心房 — 善き前世もあった 386
- 祇園女御 — 善き出自もあった 390
- 嘆声 — 治承より改元し、養和へ 400
- 頼朝の首を俺の墓の前にかける
- 興福寺、東大寺、大仏もすべて炎上…

——「かくなるうえは、全軍、一カ所に集まり、最期を遂げるしかない。決戦だ」(七の巻)

——「頼朝がすでに謀反を起こしたってよ。だとしたらだ、この義仲も起とうと思うぜ」(六の巻)



義経 vs 義仲

生ずきの沙汰 — 日本一の名馬 529
宇治川先陣 — 先駆けの名譽 534
河原合戦 — 今日を最後と 541
木曾最期 — お終いの二騎 546
樋口被討罰 — 木曾軍消失 554

義仲、戦死
(BLの名シーンと……)

六ヶ度軍 — その猛将平教経 558
三草勢揃 — 揃いに揃う源氏 562
三草合戦 — 良いのは夜討ち 568
老馬 — 道を知る一頭 570

義経、鶴越
での奇襲!

一二之懸 — 抜け駆けを競う 575
二度之懸 — 兄弟あり、父子あり 582
坂落 — 奇襲者義経降り立つ 587
越中前司最期 — 非情、騙し討ち 590

立ち読み
できます!

忠度最期 — その腹に歌一首 594
重衡生捕 — 乳母子の醜態 597
敦盛最期 — 当年十七歳散る 600
知章最期 — 子が父が馬が 603
落足 — 一門の漂海、再度 607
小宰相身投 — 妻はあとを追う 609

義経、屋島に
平家追討に

逆櫓 — 四国を前に 697
勝浦 付大坂越 — 四国にて、破竹 703
嗣信最期 — 主君の身代わり 709
那須与一 — 揺れる扇が 715

「鎬矢が海に落ちる。
扇が空に舞いあがる」

志度合戦 — 源義経、四国を平定 723
鶏合 壇浦合戦 — 海上に両氏が 728
遠矢 — 奇瑞はあらかじめ告げる 734
先帝身投 — 天皇とその祖母と 740
能登殿最期 — 壮絶な死 743
内侍所都入 — 合戦終わる 748

頼朝、義経に
イラッとはじめる

鏡 — その由来 760
文之沙汰 — 持て囃される弟、猜疑の兄 762
副将被斬 — また八歳死す 765
腰越 — 兄、弟を容れず 770
大臣殿被斬 — 父が死に、子も 775
重衡被斬 — 阿弥陀如来と繋がる 781

九の巻
絶対オススメ
必読巻!!



絶対オススメ
必読巻!!

「日ごろはどうとも感じぬ鎧が、なんだかよ、今日は重いぜ」(九の巻)

平家、滅亡

「波の下にも都がございますよ」(十一の巻)

十の巻

首渡 — 長子の長子の妻子 619
内裏女房 — 都の捕虜 624
八鳥院宣 — そこに書かれた内容 631
請文 — 断腸の思いで 632
戒文 — 法然上人が称名を勧める 637
海道下 — 鎌倉までの道行 642
千手前 — 鎌倉での待遇 648
横笛 — この人の悲恋もあり 657
高野巻 — 弥勒を待つ 662
維盛出家 — 遺言を託す 666
熊野参詣 — 三山を巡る 670
維盛入水 — 那智の沖へ 673
三日平氏 — 四月、五月、六月、七月 679
藤戸 — 七月、八月、九月 688
大嘗会之沙汰 — 九月、十月、十一月、極月 695

美貌の中將、最期

十二の巻

義経、頼朝から逃げて奥州へ

大地震 — それは突如 791
紺搔之沙汰 — 第二の髑髏 795
平大納言被流 — 末路は北国 797
土佐房被斬 — 弟への刺客 800
判官都落 — 脱出する弟 806
吉田大納言沙汰 — 時代の転換 810
六代 — 嫡流の一、二、三、四、五、六代め 812
泊瀬六代 — 六代その後と、他の滅びと 828
六代被斬 — 撥が消える 839
灌頂の巻
女院出家 — お布施は御子の 850
大原入 — 庵室 854
大原御幸 — 訪問者 857
六道之沙汰 — この六つの世界 863
女院死去 — 紫雲がたなびいて 869
建礼門院と後白河、対面

しかし、それでも、それでも、祈りつづけたならば。(灌頂の巻)

生命ある者は必ず死ぬ。出会った者は必ず別離する。これが人の世の無常。(十の巻)

第一線の作家が訳す古典新訳、選り抜かれた近現代作品！

池澤夏樹 個人編集

日本文学全集

全30巻

(※ 未刊)

08	07	06	05	04	03	02	01
今昔物語 福永武彦訳	枕草子 酒井順子訳	源氏物語下 角田光代訳	源氏物語中 角田光代訳	源氏物語上 角田光代訳	伊勢物語 森見登美彦訳	口訳万葉集 折口信夫	古事記 池澤夏樹訳
宇治拾遺物語 町田康訳	徒然草 内田樹訳	日本霊異記 伊藤比呂美訳	方丈記 高橋源一郎訳	更級日記 江國香織訳	土左日記 堀江敏幸訳	新々百人一首 丸谷才一	百人一首 小池昌代訳
夏目漱石	とくとく歌仙 丸谷才一他	春色梅児管美 島本理生訳	通信総籬 いとうせいこう訳	雨月物語 円城塔訳	好色一代男 島田雅彦訳	曾根崎心中 いとうせいこう訳	平家物語 古川日出男訳
夏目漱石	樋口一葉 たけくらべ 川上未映子訳	小林一茶 長谷川權造	与謝蕪村 辻原彦彦	松尾芭蕉 おくのほそ道 松浦寿輝彦訳	義経千本桜 いしじんじ訳	女殺油地獄 桜庭一樹訳	能・狂言 岡田利規訳
中上健次	大江健三郎	開高健	日野啓三	吉田健一	丸谷才一	辻邦生	石川淳
石牟礼道子	須賀敦子	近現代作家集 I	近現代作家集 II	近現代作家集 III	近現代詩歌	詩 池澤夏樹選	短歌 穂村弘選
俳句 小澤實選	日本語のために						

第II期 完結!!



***今後の刊行予定**

2017年	3月	近現代作家集	I
	4月	近現代作家集	II
	5月	近現代作家集	III
	7月	源氏物語	上
2018年	3月	源氏物語	中
	12月	源氏物語	下

※刊行順、刊行月は予定です。
変更する場合があります。